

再就職準備講座ルトラヴァイエの実践 ——困難な状況にある女性の自己決定を支える——

小園 弥生

＜ キーワード ＞

女性の自己決定、女性の再就職、自立支援、ファシリテーター、事業システム

＜ 要 旨 ＞

女性の就労を支援することは女性センターにおいて柱の事業の一つである。就労支援は今日、困難な状況に置かれた女性の人生の自己決定を支援することと同義語である。

ユーザーである女性たちはどのような状況をのりこえて生きていく人々であり、その人々に役立つ講座はどのような内容・構造から成っており、センターの全体の事業システムの中でどう位置づけられるかを考えていく。また、講座の運営を担当するファシリテーターの役割について、考察した。

1. 女性センターのユーザーとはどういう人々か

「こんにちは。先月、ワードのマウス検定試験を受け、なんとか合格しました。ヘルパー講座を受講したことから、仕事も決まりました。今月よりY社会福祉法人の新しくオープンしたデイサービスとショートステイの施設で調理員として働いています。今後、介護のほうも少しずつやりたいと思います。また、これから大検を始めることにしました。勉強はCDで暗記勝負なので、これから出かけるときはいつも聞いていようと思います。またメールします」(講座を修了して半年後のKさん、31歳)。

Kさんは子どもの頃から母子家庭に育ち、中学卒業後、働きながら16歳で一人暮らしを始めた。19歳で結婚、20歳で出産してまもなく離婚。食べていくためにさまざまな仕事をしてきたが、生活を共にした男性からは自分や子どもに暴力をふるわれてきた。そこから抜け出し、シェルターをへて母子生活支援施設に11歳の子と暮らすようになって半年後、「ずっと働いてきたので、働かないでいるのはたいくつです。資格も学歴もない私ですが講座に参加してがんばりたい」と、横浜市女性協会の主催する「女性のための再就職

準備講座ルトラヴァイエ」にやって来られたのだった。

11日間の本講座最終日、「料理の上手なヘルパーさんになりたい」とおっしゃった。その後、7日間のオプションパソコン講座、中級パソコン講座と進みマウス検定を受けるいっぽう、元教員の講座仲間に補習特訓を受けて職業訓練校ヘルパーコースに合格する。と同時に、横浜市がこの年からもうけた母子家庭向けのヘルパー講座にも6倍の倍率のなか受講決定。女性福祉相談員や生活保護担当、母子施設職員、友人等々と相談の上、まだ心身の傷が回復していない子どもとの時間を確保するために、毎日ではない講座のほうに進む。会うたびに顔がみるみる自信に輝いていくKさんは書いている。

「私はこの先一生福祉の仕事に関わっていこうと思います。ヘルパーだけを続けるのではなく、乳児院や障害児施設やいろいろな場所で活躍していきたいと思っています。そして、息子が大きくなったときにいっしょに福祉のしごとができればいい。これから私は夢に向かってがんばります！」(ルトラヴァイエ修了者の会ニューズレター17号/2004年10月)。習ったパソコンを駆使しているらしく、クリップアートで

貼り付けた絵は、人が踊るように両手を高く上げて大地を踏みしめている絵だった。

もう1人、紹介したいのは42歳のYさんだ。講座修了1年後にいただいた手紙から。

「ようやく週2日のパート勤務ですが仕事が決まりました。地方法務局の中の人権擁護委員会での事務です。面接官も私の現立場（DV被害を受け、シェルター利用後2児を連れて自立。裁判でDVの事実が認定され、離婚成立したばかり）を理解してくださり、あなたの経験を仕事に生かしてくださいと教えてくださいました。人権擁護委員とは“第一に相談者の胸の内をしっかりと受けとめ、限られた時間の中で相談者自らが解決の糸口を見出せるようにお手伝いをする役目”とうかがいました。どの相談室でもみな同じ志でのぞんでいらっしゃるのですね。私の第二の人生をこのようなお仕事でスタートできることをうれしく思います。体調も万全ではないので、まずは少ない日数ですが、パート勤務しながら経験を積んでいこうと思います。あせらずがんばります。ではまた」

講座初日に行うフォト・ランゲージ（100枚の写真から2点＝現在の自分と将来になりたい自分＝を選んで自己紹介する）のプログラムのときに、現在の姿として燃え立つ炎の1点を選び「私は夫からひどい暴力を受けてきて、いま心はこのようです」と彼女が話した瞬間は鮮烈であった。新聞記事で当協会の相談室を知ったと言い、裁判の節目に相談員から送られたというしおりを見せながら、どんなに励まされたかとフリーディスカッションで切々と語っていた。

講座後、元夫を相手とした裁判が決着したYさんは、いまでは「DVと女性の健康」のテーマで相談員が医療現場などに出勤研修講座に行くときに同行し、市民当事者の講師として体験を語り、大いに貢献してくださっている。

2人の例を紹介したが、彼女たちは決して特別な女性ではない。いまや、毎日続々と女性センターを訪れるユーザーのひとりだといってよい。かつてのように「主婦の再就職」という言葉ではもはや語れない講座である。独身女性、シングルマザー、離婚準備中の女性、あるいは夫のリストラや病気などで働かざるを得ない、自分自身うつ症状や健康上の問題をかかえている、それでもどうやって食べていくかという切実な動

機をもって、講座にいらっしゃる方がいまでは大半である。

さらに以前に比べると、離職期間はけして長くない。離職3年未満の人が過半数のときもあり、豊かな職業経験をもつ受講者が増えている。ディスカッションの席では、自分ひとりの経験では知りえない、さまざまな職種や業界の事情や、退職せざるをえなかった現実的な事情をたがいに知る。子育てのほかに親の介護や、自分が体調を崩して、あるいは人間関係に疲れ果てて退職せざるをえなかった、という実話は本当に身につまされる。

税金で運営される女性センターは、さまざまな困難の中で自分の人生を選び直そうとされる女性一人一人の自己選択・自己決定を支えるシステムをもち、地域の中で有効な、柔軟で使い勝手のいい社会資源たりえなければならぬと考える。それについては第4項で説明することにし、まずルトラヴァイエがどのような講座であるのかを述べたい。

2. 講座ルトラヴァイエとは

横浜市女性協会が1988年の横浜女性フォーラム（2005年4月、「男女共同参画センター横浜」と改称）開館以来の定番講座として続けている「女性のための再就職準備講座ルトラヴァイエ」は2005年春に第44期の開講を迎えた。定員24人の講座で、すでに修了者は1000人を越えた。2003年度に実施した追跡調査によると、回答者203人のうち、75パーセントの人がなんらかの職に就いていた。

「ルトラヴァイエ」とはフランス語で、「再就職」の意味である。語源には「(大地を) 耕す」という意味もあるそうだ。何か知識を注入するのではなく、自分が本来もっている大地を耕しなおす、というイメージである。開館前の調査で横浜市では他の大都市に比べて結婚や出産で仕事をやめってしまう女性が多く、30代から40代女性の就労率が著しく低いことがわかった。そこで、子どもが手を離れたときに再び働きたいと思ってもどうすればよいかわからない、という女性たちを応援しようと講座を組み立てたのである。

当時参考にしたのがフランスで1973年に設立されたルトラヴァイエ協会で行っているプログラムだ。同協会が開発した「女性のための職業計画プログラム」を日本流にアレンジし、88年当時はワープロ講習を含む25日間（1日3時間）の講座としてスタートし



た。現在はだいぶ短縮し、本講座 11 日間（33 時間）のほかに、希望者はパソコン初級講座 7 日間（28 時間）を受けることができる。本講座の主な内容は、（表 1）のとおりである。

開講当初もいまも講座の根幹部分は変わっていない。女性の自己発見を助け、再就職口を得るために必要な技術を、ポイントをおさえて伝える。表現力や論理力をつけるために連日フリーディスカッションの時間をもうけている。毎朝 9 時半の定刻に始まる講座は、子連れで通ってくる方や健康状態に自信がない方にとってはとくに、出勤する訓練にもなる。ひとことで語るコンセプトは「自分を知る、社会を知る、自分で決めて行動する」である。

受講者はおびたしい情報を毎日湯水のように浴びることになるが、しかしルトラヴィエの最大の特徴は昔もいまも講座の前半、「自分を知る」ことにじっくりと長い時間をかけることであるといつてよい。たくさん練習問題をこなすなかで自分の得意分野を発見していくこと、フリーディスカッションでは人の批判をせず語りたことだけを自分の言葉で語る訓練を行うこと、なにごとにもプラス思考で考え、できないことを数えざることを数え上げ自分を肯定していくこと、などを徹底的に毎日繰り返す。

講師陣にはこの時代、立派な肩書きやびかびかのキャリアよりも、女性の置かれた困難な立場や心情に共感できる、いわば当事者性をもった講師が有効と考えている。どこをどんなふうに支えたら人は一歩を踏み出せるのかを自分の経験からわかっている、先行く

女性。なおかつ知識も情報も豊富にもっている講師が望ましい。

パートであれなんであれ、まずは自分の身の丈に合うところから労働市場に出てみることに、資格は実務経験があって初めて役立つものであり、実地の経験から潜在能力は開花し磨かれていくことをどの講師も語ってくれる。

3. 講座を運営するファシリテーターの役割

ここで講座担当者として毎日司会進行・運営を行うファシリテーターの役割について少し述べてみたい。というのは、私がこの講座を担当していた 2002 年春から 2004 年春までの 5 コースを通じて、いちばんこのことを考えさせられたからだ。ファシリテーターはどのように存在しているべきなのか、いまだに答えが出ているわけではないが、ひとつだけ言えるとしたら、ファシリテーターはなによりも講座が安全な場として機能し続けることを支える役回り、ということであろう。

それだけでなく自分の職業観や人生観がどうしても出てしまう講座の連日のファシリテートは重労働である。自分自身が深い悩みの渦中にあたり、健康をそこねている状態ではとても身が持たない。「しごとは第一に体力」と受講者に言うとき、言っている自分自身が健康で体力のある状態を保たなければならない。自分の価値観や状態、くせなどについての自己理解も不可欠である。さらに最近ではさまざまなトラウマをかかえた受講者が多く、その背景理解も必要である。私

【表 1】講座ルトラヴィエの主な内容

時間：平日 9 時 30 分～12 時 30 分 FD：フリーディスカッション ☆は専門講師

	主 な 内 容
第 1 日	オリエンテーション、写真による自己紹介、練習問題、FD
第 2 日	FD、相談室活用法、練習問題(グループワークあり)
第 3 日	FD、ライブラリ活用法、練習問題(グループワークあり)
第 4 日	FD、練習問題まとめ、職業興味テスト
第 5 日	先輩に聞く事例「私がしごとにくまで」(2 例)
第 6 日	履歴書・職務経歴書の書き方☆、インターネットで就労情報検索デモ
第 7 日	フィールドワーク(訪問)☆：ハローワーク・社会福祉法人・派遣会社
第 8 日	FD、働く女性と税・法律☆(21 世紀職業財団協力)
第 9 日	採用側はなにをみるか、面接のロールプレイ(実習)☆
第 10 日	グループでのキャリア相談会(事例検討)☆
第 11 日	全員の職業計画表発表、ふりかえり
第 12-18 日	オプション・初級パソコン講座

自身は、就労支援に特別知識があるわけでもなく、心の専門家でもない。ただ、女性センターの職員としてさまざまな事業を担当する中で、とくに相談員の同僚とともに自助グループ支援のしごとをしてきたことが、ファシリテーターを務める際に大いに自分自身の指針となり支えになったと感じている(自助グループ支援事業については『女性施設ジャーナル』第7号に執筆したので興味のある方は参照されたい)。

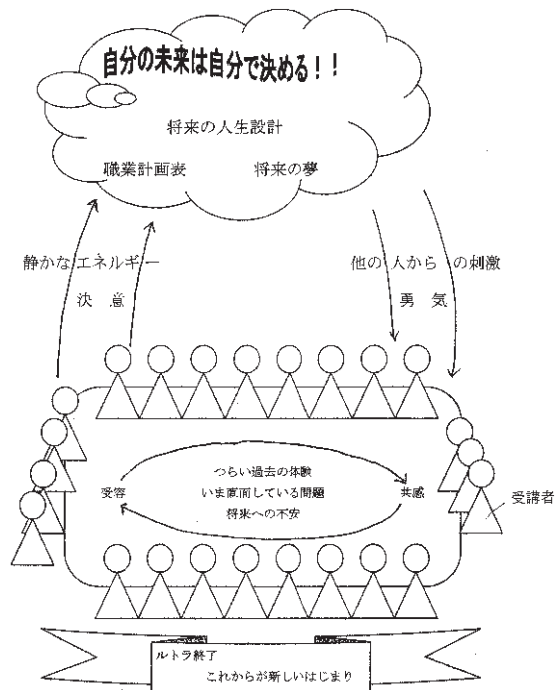
それはどういうことかという、人が自分をひらいて何かをのりこえようとするとき、対等な関係にあるなかまがいかに必要であり、支配被支配の関係をもたないために競争の場ではない「安全な場」をつくるのがどんなに大切なことを身をもって知っていることなのだ。ファシリテーターはかけながら場を見守る役目であるが、安全な場になにか阻害要因が生じたとき、生じそうときは察知したり、からだをはって介入したりしなければならない。

講座の初日にルールとして「自分の言いたいことだけを自分の言葉で言う」「言いたくないことは言わなくてよい」「ここで聴いた個人的なことはこの場に置いていく」「人の批判はしない」というような約束事を呈示することも重要なことである。

また、受講者には当然さまざまな価値観をもった人がおり、ファシリテーターも自分の価値観をもっているわけだが、それに固執せず、無になって人の価値観や経験を聞くことが必要だった。そのため、自分の枠組みがこわれたり揺らいだりする。自分がだめなせいではなく、そういう役回りなのである。それでも、自分の個性と合わない受講者もいるだろうといつも不安だった。ファシリテーターはそういう意味でも、複数いることが望ましいと思う。

一人一人の方の自己紹介や語りを聞くとき、内容をデータとしてメモに記録するのではなく、語っている表情や声の調子も含めて心に記憶する。その方のいいところをひとつでも多く発見し、ことばにしてみなで確認する。そうしていい「気」が循環していくとき、グループの力というもの最大限に機能していくように思う。なかまのなかで人は自分が本来もっている力に自分で気づき、自信を回復していく。図1は受講者Mさんが講座後にふりかえって描いてくれたイメージ図である。

ここで、西田真哉さんの挙げる「ファシリテーターであるために望ましい条件」を紹介しておきたい(岩



【図1】職業計画発表日のイメージ図

波新書『ワークショップ』中野民夫著、より)。迷ったとき、悩んだときに読み返すと不足点など思い当たることが多かった。

①主体的にその場に存在している、②柔軟性と決断する勇気がある、③他者の枠組みで把握する努力ができる、④表現力の豊かさ、参加者への反応の明確さがある、⑤評価的な言動は慎むべきとわきまえている、⑥プロセスへの介入を理解し、必要に際して実行できる、⑦相互理解のための自己開示を率先できる、開放性がある、⑧親密性、楽天性がある、⑨自己の間違いや知らないことを認めることに素直である、⑩参加者を信頼し、尊重する。

講座の中では、女性が女性であるというだけで父親からの言葉の暴力、あるいは性的な虐待、夫からの暴力、たとえば交友関係を断ち切られるなどさまざまに力を奪われるような経験をへてマイナスから出発せざるを得ないことがいかに多いか、いつも感じてきた。だから、自分は自分のままで十分よくやっているのだとまず自分が自分を認めてやることなくして、いくら情報や知識をつけて就職したところでそれは早晚たゆまないものになってしまうのは目に見えている。

「講座に来て、やっと自分を肯定できたような気がする」という感想を述べる人は多い。しかし、講座は

きっかけに過ぎず、元のもくあみに戻ってしまわないためにはその後にこそなかまどうしの支えあい、励ましあい、情報交換が必要であり、有効である。その意味で講座ルトラヴァイエでは講座後、同期会だけでなく「ルトラヴァイエ修了者の会」という自主的な会ができており、参加希望者の会費で運営されている。現在、会員は約140人。美しいホームページも作られている。(アドレス <http://retra-net.hp.infoseek.co.jp/index.html>)

1 担当者がそれぞれのユーザーに対してできることは多くない。むしろ、センターの資源であり相互支援の場であるこのような自発的な会が支障なく機能していくよう、支援のしくみをつくることが重要であろう。具体的には会合の場の提供、会報誌づくりやホームページ作りの際のIT環境の提供、運営の相談があれば応じたり、かげながら見守ること、などである。修了者の会では同期の仲間とはまた違った人にも出会える場となり、さまざまな段階のしごとや生活上の悩みのわかちあい、智恵の伝えあいが日常的にメーリングリストや誌上で、ミーティングで行われている。

自立や自己決定に特効薬はない。講座でいったん気持ちが高まっても、家に帰って一人になれば意気消沈するのは当然のことだ。だからこそ、持続可能な発展を支えるために、循環型の温泉のような修了者の会を支援することまでがファシリテーターのしごとであるといえる。

4. 自己決定を支える事業システム～自立支援機能マップ

最後に、女性センターの中で講座ルトラヴァイエはどのような事業システム(地図)のなかに位置するかを、述べてみたい。

冒頭でも述べたように、センターが有効な社会資源たりえ、さまざまに入り組んだ困難の中で自分の人生を選び直そうとされる女性一人一人の自己選択・自己決定を支えるためには、常に更新されていく事業システムをもっていなければならない。2005年現在の時点では、私たちのセンターでは図2のようなシステムが各プログラムの有機的な連関性をもって機能していると考えている。講座ルトラヴァイエが開館以来20年近くにわたり成果を上げつづけているのは、貸し会議室のような場所で講座だけを行っているのではなく、このようなシステムの中に位置づけられた講座だから

である。

「わかちあい・支えあい」「情報」「保育」といった機能に下支えされて、相談や講座がある。地図のまんなかに位置するのが現在では「自己信頼感の向上」を目的とする事業である。自立は自己決定と言い換えられるが、それをなすには課題の認識、健康、就業などが欠かせない要素である。ユーザーはどこから利用してもかまわない。自分の必要に応じた入り口から入ってきて、課題を再発見されることもあり、多角的に利用してもらってこそそのセンターである。人が本来もっている自分の力を最大限に引き出すためのシステムを整えること、それが私たちの仕事であると考え、試行錯誤の日々は続く。

(こぞの・やよい 財団法人横浜市女性協会)



【図2】女性の自立支援機能マップ